

学校×NIIGATAアートリンク 鑑賞と美術館——活用のための研修会 実施報告

宮下 東子

はじめに

新潟県では、県立美術館2館と新潟市立の美術館2館の4館が連携し活動する「NIIGATAアートリンク」というネットワークをつくり、新潟のアートシーンを活性化することを目指し、活動している。これまでスタンプラリー、トークセッション、4館共同の展覧会スケジュールや講座一覧の作成などの活動を行ってきた。ここから派生し、平成30年に立ち上がったのが「NIIGATAアートリンク教育普及部会」である。

本稿では、令和3年度にこの「NIIGATAアートリンク教育普及部会」の主催により実施した「学校×NIIGATAアートリンク 鑑賞と美術館——活用のための研修会」について報告する。

I. 発端

近年、美術館での教育普及活動がますます重要視される中、NIIGATAアートリンク教育普及部会では、各館の教育普及担当学芸員が集まり、何か共同でできる事業はないかと探ってきた。しかし、各館の活動を見学するなどして参考にすることはできても、県と市という立場の違いや、各館の立地状況や人員配置の違いなどが立ちはだかり、NIIGATAアートリンク教育普及部会として行うことのできる、なかなかこれといった活動を見いだせずにいた。

話し合いを重ねる中で、共通する関心事として浮かび上がってきたのが、学校との関係である。公立美術館の役割の一つとして、学校教育との連携があげられるが、学習指導要領でも地域の美術館の利用や連携が謳われている中、特に県立美術館の立場としては、南北の距離が長く離島も抱える新潟県では県全域にサービスを行き渡らせるのは大変難しく、また新潟市立の美術館では、新潟市外の学校は行政サービスの範囲外であるのは当然であった。

そんな中でも、各館の活動の中で学校の図工美術の教員から漠然と伝わってくるのは、授業での鑑賞についての悩みである。例えば、新潟県立近代美術館では、学芸員が学校に出向いて授業を行う「出前講座」や教員研修会の講師を務めるなどの活動を行っており、新潟市美術館では、学校へ出向いての授業と美術館展示室での鑑賞を組み合わせたコンテンツである「アートリップ」を実施しているが、これらの事業は、美術館の学芸員と児童生徒が直接関わりを持つことができる「特別な」授業というべきであろう。そのような「特別」ではない日々の授業の中で、学校教員が図工美術の「鑑賞」に関してどんな悩みを持ち、何を欲しているのか、それに対して美術館はどんな手助けができるのか、それを具体的に探りたい、という声が上がリ、先生方の生の声を聞くための事業を行う方向となった。

II. 枠組

形態と名称

事業の形態と名称を決定するにあたり、話し合いの中で出た考え方は、以下の通りである。

- ・学校教員が参加しやすくするために、「研修会」の体とする。
- ・「研修会」という形で実施するとしても、美術館から教員に向けて教えるという一方的な形をとるのではなく、対等の立場で話をすることによって、双方ともが何かを学び取ることができる場としたい。双方の交流を深め、忌憚のない意見を引き出せるよう、ワールドカフェの手法を採用する。
- ・美術館の活動の方向を見極めるために学校教員の意見を拾いたい、というのが美術館側の希望だが、美術館に一方的なメリットがある形ではなく、参加した教員も成果を持ち帰ることができる方がよいだろう。そこで、美術館が推奨する「対話型鑑賞」の効果を実感してもらうことにする。

- ・時期は、学校が夏季休暇に入った頃がよい。時間は、遠方からの参加者にも配慮して午後半日とする。
- ・新型コロナウイルス感染症流行に配慮して、現在美術館では対話型鑑賞の実施を中止しているため、開館日での実施ははばかれる。他の来館者への影響にも配慮して、休館日に実施する。
- ・対話型鑑賞を実施するためには、常設展のある館を会場とすることが望ましい。この研修会を今後も続けていくことを考慮すれば、まずは新潟県立近代美術館を会場とする。
- ・対象者の範囲としては、幼稚園・保育園から高等学校までの教員が考えられるが、対話型鑑賞の体験会を採り入れることを考慮すれば、対話(相手の意見を聞き、これを踏まえて自分の意見を述べる)ができるようになる年齢は小学生からと捉え、対象は小学校から高等学校までの教員とする。図工美術が専門・担当であるかどうかは問わない。興味がある方であればどの教科の先生でも受け入れる。
- ・意見交換の際のキーワードは、以下の点から導き出す。①美術館と学校の連携がテーマである以上「鑑賞」を中核に据える。②あくまでも美術館側と教員側が対等であることがわかるニュアンスの言葉を使用する。
- ・コロナ禍の中での実施であることからディスタンスも考慮し、ワールドカフェのグループの人数を教員4名と学芸員1名の5名とし、これを6グループ作ると想定して、教員参加者の定員を24名とする。
- ・新潟県全域を視野に入れた学校現場の実情とニーズの把握を目指すため、定員を超えた応募数があった場合、地域および校種のバランスを見ながら参加者を選定することとする(実際には定員通りの人数の応募であったため、選定の必要はなかった)。

以上の考えから、研修会の形態と名称、日程は下記のとおりとなった。

事業名：学校×NIIGATAアートリンク 鑑賞と美術館——活用のための研修会

実施日時：令和3年7月26日(月)13:00～16:00

会場：新潟県立近代美術館 2Fギャラリー

内容：受付 12:30～13:00

第1部 コレクション展示室での対話型鑑賞(40分程度)

第2部 教職員と学芸員の意見交換会「鑑賞、どうしてる？」(60分程度)

募集と申込

- ・この研修会を新潟県全域の小・中・高等学校の教員に通知するために、県内に29ある市町村教育委員会宛に文書をメールで送付し、各教育委員会から管轄の小中学校へ、各小中学校の校長から担当教諭へと渡すよう手配した。
- ・募集のスケジュールは次の通り
発送：6月3日(木)／申込締切：6月21日(月)／研修会当日：7月26日(月)
- ・申込総数は、定員24名のところ25名(早い時期に1名キャンセルがあったため全員の受け入れが可能となった。当日は2名の欠席があった)
- ・申込者の内訳は下記のとおり。([]内は当日の参加者数)
校種内訳：小学校教員8名[7名]／中学校教員10名[9名]／高等学校教員3名[2名]／中等教育学校教員2名[2名]／特別支援学校教員2名[2名]
地域内訳：下越地区11名[9名](佐渡1名を含む)／中越地区11名[10名]／上越地区3名[3名](柏崎市2名を含む)
- ・申込者に関する特記事項：
中越美術教育研究会の事務局を担当する長岡市立上組小学校の教員4名が一括で申込。
また、村上岩船地区の美術担当教員4名と、この地区の美術の指導者となっている教員(校長)1名が申込(この地区の教員は、翌年に控えた新潟県中学校教育研究会美術部の研究会のため、鑑賞に関して問題意識を持っていた)。

Ⅲ. 研修会当日

当日の配付資料

- ・ プログラム・参加者名簿
- ・ NIIGATAアートリンクに参加する美術館 4 館の紹介(各館の教育普及プログラムと学校向けの免除規定をそれぞれまとめたもの)
- ・ ワールドカフェに関する資料
- ・ 事後アンケート用紙

プログラムと内容

- 12:30～13:00 受付
- 13:00～13:20 オリエンテーション(2階ギャラリー)
趣旨説明／NIIGATAアートリンク 4 館の活動紹介／グループ分け
- 13:20～14:00 対話型鑑賞の体験(コレクション展示室)
3 グループに分かれて実施: A + B グループ／C + D グループ／E + F グループ
- 14:10～15:20 意見交換会「鑑賞、どうしてる？」(2階ギャラリー)
学校教員 4 名 + 学芸員 1 名で構成される A～F の 6 グループで実施
1 ラウンドは15分、全 4 ラウンドで構成
- 15:20～15:30 まとめ、挨拶
- 15:30～16:00 コレクション展自由観覧

Ⅳ. 研修の内容とアンケート集計結果

以下、研修会の詳しい内容とこれに関するアンケートの集計結果を記し、その考察を試みる。

対話型鑑賞の体験

対話型鑑賞は、後半の意見交換時の A～F の 6 グループを 2 グループずつ 3 つに分け、教員 8 人ずつのグループに、学芸員 1 名がファシリテーターを務める形で実施した。ファシリテーターを務めた学芸員ととりあげた作品(いずれも新潟県立近代美術館所蔵あるいは寄託作品)および問いかけの内容は以下のとおりである。

上池仁子(新潟市美術館学芸員／A・B グループ担当)

三芳悌吉《踏切》1951年(図1)

「二人の関係はなんだろう？」「ここはどういう場所？」「二人の会話は？」「もし踏切が開いたら？」

白髪一雄《志賀 # 107》1973年(図2)

「どうやって描いている？」「始まりは？」

宮下東子(新潟県立近代美術館学芸員／C・D グループ担当)

元永定正《作品》1965年 寄託作品(図3)

「どうやって描いた？」「絵具を流した順番は？」

海老原喜之助《燃える》1957年(図4)

「絵の中で、何が起きている？」「黒い線、うねった形はそれぞれ何？」「動いているものはある？」「題名をつけるとした

ら？」

伊澤朋美(新潟県立近代美術館学芸員／E・Fグループ担当)

岡本太郎《顔》1965年(図5)

「何が描かれている？」「どんな色が使われている？」

三芳悌吉《魔船の中で》1976年(図6)

「何が描かれている？」「人が使っていたと考えられる物は？」「生きているものはある？」「何が起きた？」「ここはどこ？」



(図1) 三芳悌吉《踏切》1951年



(図2) 白髪一雄《志賀 #107》1973年



(図3) 元永定正《作品》1965年 寄託作品(駒形十吉記念美術館蔵)



(図4) 海老原喜之助《燃える》1957年



(図5) 岡本太郎《顔》1965年

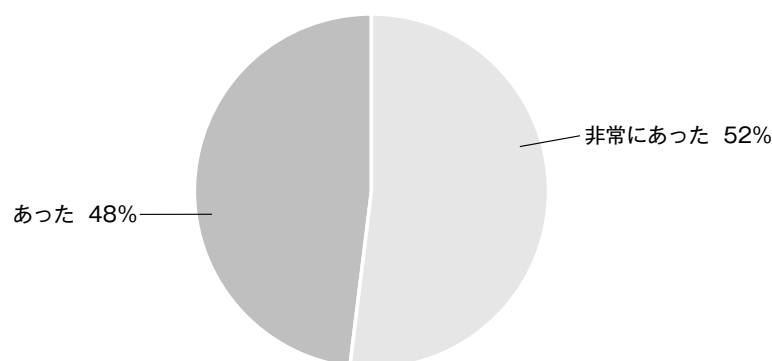


(図6) 三芳悌吉《魔船の中で》1976年

対話型鑑賞の体験に関するアンケート集計結果は以下の通りである。(参加者22名／アンケート回収数21 以下同)

1. 実際に対話型鑑賞を体験し、変化や発見(気づき)はありましたか。

■非常にあった ■あった ■どちらともいえない ■あまりない ■ない

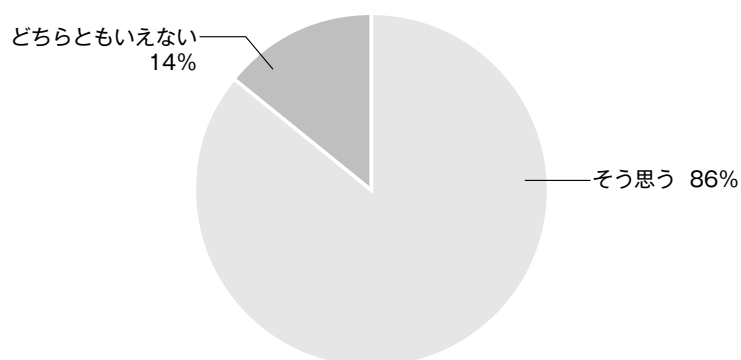


この研修会の参加者22名は、ほぼ募集通りの人数であったとはいえ、申請して受講できなかった教員は一人もおらず、けっして多い人数だったとはいえない。今回の参加者は、鑑賞に関して特に意識の高い教員が集まったと考えてよいと思われる。当然、美術館としても、これまで学校教員に対して、研修会講師として対話型鑑賞の啓蒙活動の実施や、日々の活動の中での教員との関わりなどもある。今回の参加者の中には、対話型鑑賞を十分に理解し、既に授業に取り入れている教員もいることはある程度把握できていた。

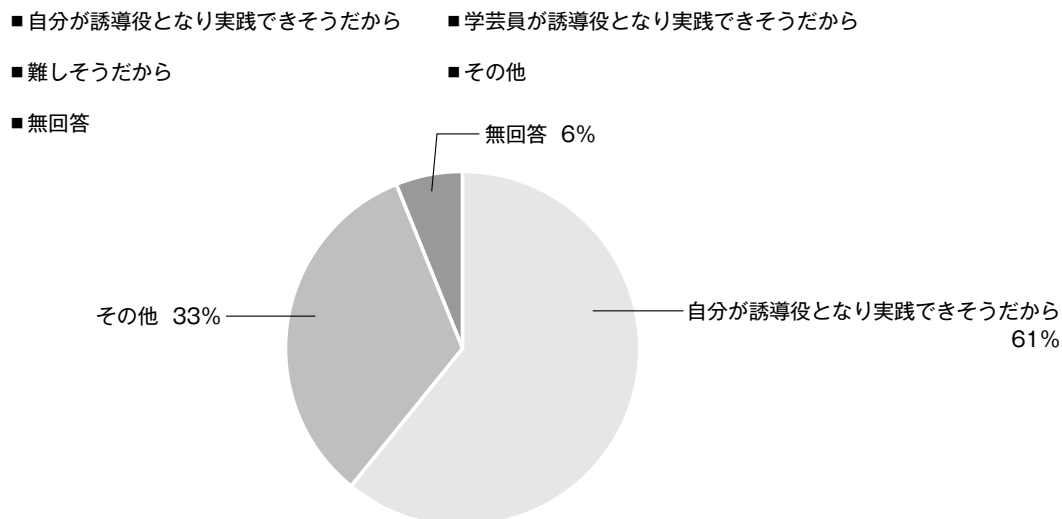
にもかかわらず、アンケートの結果では、今回の対話型鑑賞の体験により変化や発見(気づき)が「非常にあった」と「あった」だけで100%を占めていた。これは、参加した教員の対話型鑑賞への関心が高いことを示しているだけではないであろう。学校の中で図工・美術担当の職員は圧倒的に少ないと思われ、また研修等で教員同士が集まったとしても、実際の作品を前に対話型鑑賞を実施する機会もめったにないと思われる。実際の作品を前に、複数人で、しかも自身が参加して対話型鑑賞を体験することのできる貴重な機会だったのではないだろうか。

2. 対話型鑑賞を授業に役立てられると思いますか。

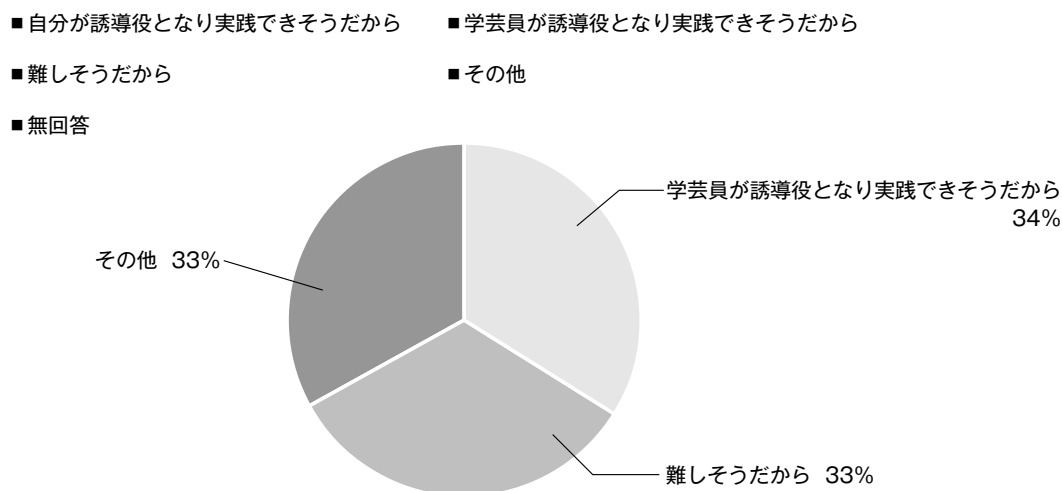
■そう思う ■どちらともいえない ■思わない



そう思う：18名



どちらともいえない：3名



3. 2で回答した理由をお聞かせください。

自分が誘導役となり実践できそうだから：11名

- ・ いろいろな導入のしかたができそうだと感じた。対話型鑑賞へのとっかかりについて、色々なアプローチを聞いてよかった。(そう思う／特別支援学校教員)
- ・ 自由に「感想」を話し合う事で、正解を言わないでよい安心感を得ることができた。生徒達にも気づかせてあげたいと思った。(そう思う／中学校教員)
- ・ 答えをすぐに探したがる子どもたちに、一石を投じてみたい。(そう思う／中学校教員)
- ・ ファシリテーターは必ずしも作品に対する知識が必要なわけではないから。(そう思う／小学校教員)
- ・ 自由に意見を出せる場をつくるファシリテーターの役割は重要なので、訓練が必要かな。(そう思う／中学校教員)

- ・本日の研修が役に立ちます。(そう思う／小学校教員)

その他：7名

- ・実際に体験してみて、気軽な気持ちでやってみても大丈夫そうだと思います。(そう思う／中学校教員)
- ・日常の授業の中で有効だと感じているから。(そう思う／中学校教員)
- ・子どもは対話型を楽しんでくれます。主体的に鑑賞できやすいところも、よいです。32～35人のクラスで、どのように導入するかが課題ですが、定期的・連続的にやるのがよさそうと思っています。(美術を通した学び、収穫が多いです)(そう思う／中学校教員)
- ・現在、総合的な学習の時間で学芸員活動に取り組んでいるから。(そう思う／小学校教員)
- ・1枚の絵に、これだけ長時間向き合って1人1人意見を言ってみるという経験が、これまでの人生でなかったので、貴重でした。長時間向き合って、他の参加者の意見を聞いているうちに、自分がこれまで見ていた目の前の絵が全く別の絵に見えた瞬間を体験することができました！(そう思う／高等学校教員)
- ・通信制の学校なので生徒と対面する授業がとても少ない(美術は年4～8回くらい)。(どちらともいえない／高等学校教員)
- ・対話型鑑賞のやり方を、実践してくださったことで、イメージがつかえました。(そう思う／中学校教員)

学芸員が誘導役となり実践できそうだから：1名

- ・なかなかそこまでの時間がとれるかどうか？→工夫してみたい
美術館でこれが行える時間がとれば、やってみたいと思います。(どちらともいえない／高等学校教員)

難しそうだから：1名

- ・特別支援学校の生徒に対話型をどのように実践するのがよいのか…。正直まだわかりません。(どちらともいえない／特別支援学校教員)

設問1では「非常にあった」と「あった」で、設問2では「そう思う」と「どちらともいえない」で、それぞれ100パーセントを占め、否定的な回答は皆無であった。多くの参加者が対話型鑑賞を授業に役立てることができると考えているようだ。

「どちらともいえない」と答えた3名の内1名は「工夫してみたい」「やってみたい」との記述が見られ、具体的に実現できないまでも対話型鑑賞を有用と捉えていることが窺えるし、それ以外の2名も、それぞれの弊害さえ排除されれば実施してみたいというニュアンスが感じられる。

「そう思う」と回答した中には「自分が誘導役となり実践できそうだから」の選択者が多いが、「その他」(選択肢では無回答でも3の記述欄に回答している場合は「その他」にカウントしている)でも積極的な意見が多く、中には既に実施していることを窺わせる記述も3件見られ、多くの教員が対話型鑑賞の有効性を認め、積極的に採り入れたいと考えていることが窺われる。

積極的に採り入れることが可能と思った心理的な理由としては、次の二点があげられよう。一つは、学芸員がファシリテーターをつとめる対話型鑑賞に参加したことで、その具体的なイメージをつかむことができたこと。さらにその過程で、必ずしも専門的な知識を持っていなくても実施が可能であることがわかって、安心感と自信を持てたことである。もう一つは、3名のファシリテーターが2点ずつの作品の鑑賞を手がけたことにより、導入(=問いかけ)のバリエーションを見ることができたことがあげられている。

さらに、参加者は対話型鑑賞の効果も感じ取っていたようである。まずは一つの作品にじっくりと向き合う機会となること。そして、「正解」が求められる多くの他教科に対して決まった「正解」がない美術の特性を生かして、主体的な鑑賞を促すことができることである。対話型鑑賞は、既に研究者等によって導き出された「答え」をただ受動的に学ぶのではなく、自分なりに感じ、能動的に考えること、それを伝え合うことで魅力を発揮する。またそのそれぞれの見解を聞くことによる多様性の魅力を、子どもたちに気付かせたいという思いも、アンケートの記述には見られた。

4. その他、対話型鑑賞についてのご意見や印象に残ったことがあればお聞かせください。

- ・学芸員の方が質問をして、より深く考えさせられたと思われます。題名を隠して考えさせるのはいいなと思いました。(小学校教員)
- ・ひとつひとつの作品を丁寧にみることができいいきっかけになりました。一人での鑑賞は流して見てしまいがちで、足を止めてじっくり物語を考えることができました。(特別支援学校教員)
- ・1枚の絵を通していろんな方々の作品の見方がおもしろかった。おしゃべりしながら、自分の見方も変化していき、もっと知りたいという思いになった。きっと子どもたちも鑑賞する時、ひとりひとりの考えが大切にされる雰囲気があると交流が楽しくなると思う。(小学校教員)
- ・自分だけでは気付けなかった視点に気付けたのが良かったのと、それ以上に、「自分だけでなく他の人もそう思うのだな」と確認出来た場面でホッとしました。(中等教育学校教員)
- ・対話型鑑賞では、できれば本物の作品を子どもたちに見せたいと感じた。しかし、現実にはなかなか難しい(美術館に連れて行くことも、美術館から本物を持ってくることも…)(中学校教員)
- ・鑑賞指導を、どのように評価するかという意見がきかれた。自分は、鑑賞によって、深められたイメージを物語にして作文させていたが、そのやり方について色々な話を聞きたい。(特別支援学校教員)
- ・ファシリテーターを交代でやってみたい。(中学校教員)
- ・同じ作品を見ていても、見方や気づきが人それぞれで何人もの感じ方を体験できました。(中学校教員)
- ・こんなにも感じ方が違うのか！と思った。他者の考えを聞くのが楽しかった。有名な絵画じゃなくても、しっかり鑑賞できるものを題材にしたい。(中学校教員)
- ・「この作品、どうやって描いた？」とプロセスを考えるのは楽しかった。(中学校教員)
- ・鑑賞者の意見を引き出す、楽しさと難しさを感じた。どうしても正解を求めてしまうので、「何でもあり」という発想を文化としていくことの大切さを改めて感じた。(小学校教員)
- ・改めて自分の見方以外で知ることができて面白かったです。(高等学校教員)
- ・子どもとやっても楽しいし、大人でやっても楽しい。一期一会の鑑賞を楽しめた。(小学校教員)
- ・他の人のいろいろな見方や考え方を聞くことができておもしろかった。ただ、高校生で意見が出るか？とも思う部分はあるが、やり方しだいかなとも思う。(高等学校教員)
- ・ひとつのテーマ、ひとつの作品から、異なる考え、異なる表現を、それぞれが追い求めることが美術の世界で、答えを求める他の教科とは違う特性だと思っています。みんな違っているのがあたりまえで正しいことです。対話型鑑賞を通してこれからの時代で求められる多様性や自己肯定感が養われる可能性があると感じています。(中学校教員)
- ・対話をすることで、間というか、あの時間、なんともいえない大切な、価値ある時間なのだと感じました。(中学校教員)
- ・いろいろ実践していこうとの思いを強くしました。(小学校教員)
- ・1つの作品を見て、みなさんで色々お話できてとても楽しかったです。(小学校教員)

この項目の記述から浮かび上がってくるキーワードを幾つかあげると、「多様性」、「楽しい」、「変化」、「熟考」、「熟覧」、「自己肯定感」、「雰囲気」といったところか。特に多かったのが「多様性」についての言及と、鑑賞を「楽しい」と感じたということであった。多くの人が異口同音に「同じ一つの作品からさまざまな見方、考え方が飛び出したことに驚いた。自分以外の見方を知ることができて楽しかった」と記述している。

ある一つの作品について「教えてもらう」ならば、おそらく答えは一つであろう。しかし、対話型鑑賞で見ると、たくさんの異なった答えが出てきて、正解・間違いの区別はない。人は、何かを判断するとき、自身の体験を拠り所にして考えることが多いと思われるが、一人一人の考え方が少しずつ違っているのは当たり前のはず。ファシリテーターが、発言者が何故そのように

考えたのか、どこを見てそう感じたのかをしっかりと聞き出すことで、異なる見方をしていた人にも、その多様な見方・考え方を理解・納得することができる。それを受け入れることで自身の見方・考え方も柔軟に「変化」して、世界を見る幅が広がり、気持ちが豊かになり、「楽しい」と感じるのである。その過程で、参加者ははからずも作品を「熟覧」し、作品の中の物語について「熟考」し、さらに、自身の見方を他の参加者に理解してもらうことで「自己肯定感」も育まれる。このような対話型鑑賞の意義を、参加者達はこの体験を通して感じたのだと思われる。

そして、忘れてはならないのは、誰もがはばからずに自身の意見を述べるには、それを安心して話せる場が必要となるということである。そんな場を整えるための「雰囲気」作りの重要性に注目した参加者もあった。

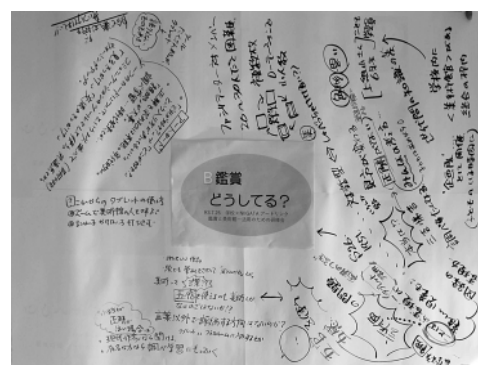
意見交換会

教員4名のグループにホストとして学芸員1名を加え、A～Fの6つのグループで実施した。一つのグループには、できるだけ異校種、異地区の教員となるように、また学芸員と教員の知り合い同士は同グループに入らないように配慮した。1グループ5名と多めの人数だが、ワールドカフェの基本に倣い、探求(各テーブルで話し合い)、他花受粉(ホストを残し、別のテーブルに移動)、統合(元の席に戻り話し合い)、その後全体で共有という4ラウンドで実施した。時間の都合でワンラウンドは少し短めの15分とした。話し合いのキーワードは、教員と学芸員があくまで対等に話せるようにとの願いを込めて「鑑賞、どうしてる?」とした。各テーブルには、ドリンクやスイーツに代えて、話題のきっかけになることを願って対話型鑑賞でとりあげた作品をプリントしたカードをそれぞれ置いた。各テーブルには紙を貼り、話し合いの内容を自由にメモしてもらった。第4ラウンドの共有時には、教員の参加者から話し合いの内容をまとめて発表してもらった。

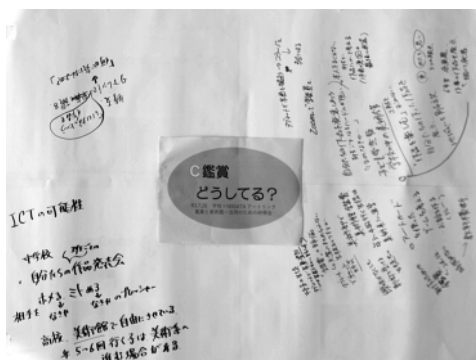
図版はワールドカフェでのテーブル上のメモである。また、意見交換会についてのアンケート集計結果は下記の通りである。



Aグループ



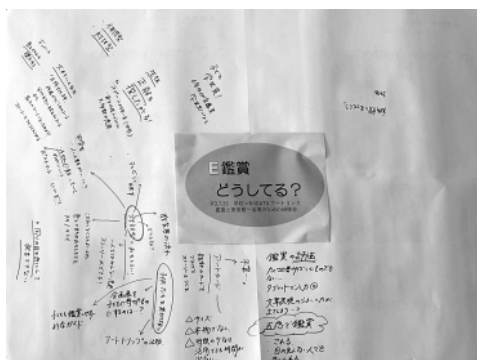
Bグループ



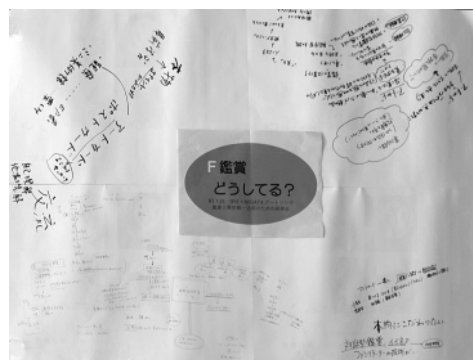
Cグループ



Dグループ



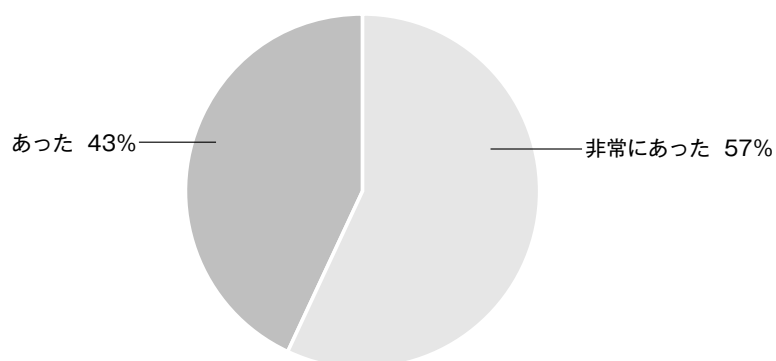
E グループ



F グループ

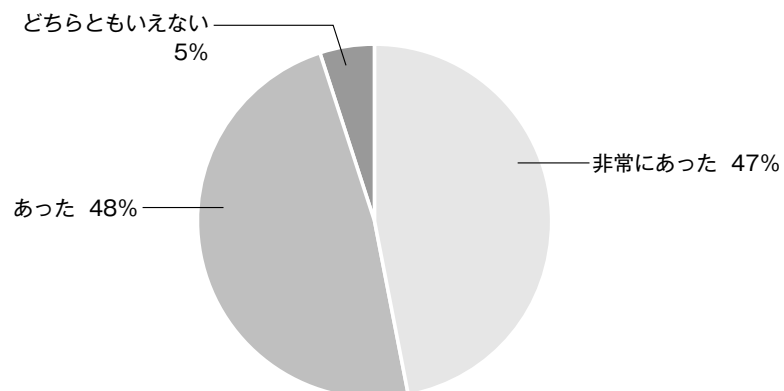
1. 意見交換で、ご自身に変化や発見(気づき)はありましたか。

■非常にあった ■あった ■どちらともいえない ■あまりない ■ない



2. 意見交換で共有した情報で授業に役立てられるものはありましたか。

■非常にあった ■あった ■どちらともいえない ■あまりない ■ない



3. 意見交換会についてのご意見や印象に残ったことがあればお聞かせください。（略した箇所あり）

- ・他校の実践内容や工夫等について聞けて良かった。（あった・あった／小学校教員）
- ・タブレットやアートカードの利点をうまく使って導入、そして、本物の鑑賞につなげたい（五感をつかったもの）。（非常にあった・非常にあった／特別支援学校教員）
- ・校種もちがっていて、いろんな立場の方のお話が楽しかった。（非常にあった・非常にあった／小学校教員）
- ・生徒作品の振り返りの際、完成後だけでなく、制作途中でも一度鑑賞をはさむと、アドバイスなどが出来て良いと聞き、なるほどと思いました。
対話型鑑賞では、作品理解というより、鑑賞者間理解の方が進むかもという意見が、ふに落ちました。（あった・あった／中等教育学校教員）
- ・対話型鑑賞に限らず、体感・五感を使って鑑賞する、というのが新鮮だった。（非常にあった・あった／中学校教員）
- ・子ども学芸員の活動について、じっくり話をききたかった。（非常にあった・非常にあった／特別支援学校教員）
- ・抽象作品の制作の導入で、五感を刺激する作品鑑賞を取り入れると、より子どもの感性が作品に生かせそう。実践してみようと思った。（非常にあった・あった／中学校教員）
- ・触れる鑑賞が欠けていることに気づいた。内面を表現する際は、色だけでなく、形も重要なので「どんな感じ」かの感覚をつかませたい。（非常にあった・非常にあった／中学校教員）
- ・もう１ラウンドしたかったです。（あった・あった／中学校教員）
- ・芸術を自分で楽しむ術を身につけるという言葉が、鑑賞教育の全てだと思いました。（あった・あった／小学校教員）
- ・小学校での子ども学芸員の実践と、学芸員さんのお言葉が特に印象的でした。（非常にあった・非常にあった／高等学校教員）
- ・鑑賞は自分が楽しむ術を見つけることというお話。子どもが「楽しめるような鑑賞への姿勢」を伝えていくのが教師だと思いました。（非常にあった・非常にあった／小学校教員）
- ・他の方のお話を伺いながら自分の考えがまとまったり、自分の考えに自信がもてたりする経験ができました。生徒たちにも経験させてあげられたらいいなと思いました。（あった・あった／中学校教員）
- ・他の方々の意見等、とても参考になった。美術・図工これからも大切にしていきたいです。（非常にあった・非常にあった／小学校教員）

ここでも、設問１・２ともに「非常にあった」「あった」で殆どを占めていた。設問２でただ一人「どちらともいえない」と回答したのは高等学校の教員で、小・中学校の手法をそのまま高等学校で活用するわけにはいかなかったのだらうと思われる。

テーブル上のメモでもアンケートの記述でも、目立ったキーワードは「五感での鑑賞」と「子ども学芸員」であった。双方とも特定の学校の取組事例から関心を寄せられたものと思われる。残念ながら、この二点に関しては、美術館が協力できることが少ないと言わざるを得ない。

「子ども学芸員」は、新潟県立近代美術館が立地する長岡市にある上組小学校の取組である。元々は地元で県立美術館があることを生かした６年生の総合学習の取組で、新潟県立近代美術館が全面的に協力していた。子どもたちは一年間の内に幾度も美術館を訪れ、鑑賞に慣れ、美術館で展示されている作品を解釈し、調べたりもする。その合間には当館とは関わりのない活動も入るのだが、最終的には美術館の展示室で自分が選んだ作品について、一般の来館者に学芸員として語りかけ、一年間の学習の集大成とするというものであった。ところが、平成30年からの美術館の改修工事のためおよそ一年間（足かけで２年）美術館が休館となったことによって、美術館での活動が途切れてしまい、そのまま今日に至っている。現在美術館としてこの小学校に協力しているのは、「学芸員のお仕事」について紹介する出前講座のみとなっており、子どもたちは、美術館ではなく、市役所や学校内に設けられた展示施設を使って活動している。おそらく、美術館との協力関係が薄くなってしまったことは、学校にとって

は後退を意味するものではなく、むしろ、美術館を越えて対象を地域社会の中に広げて進化していったと解釈すべきものかもしれないが、美術館での鑑賞活動が減ってしまったのは残念なことである。

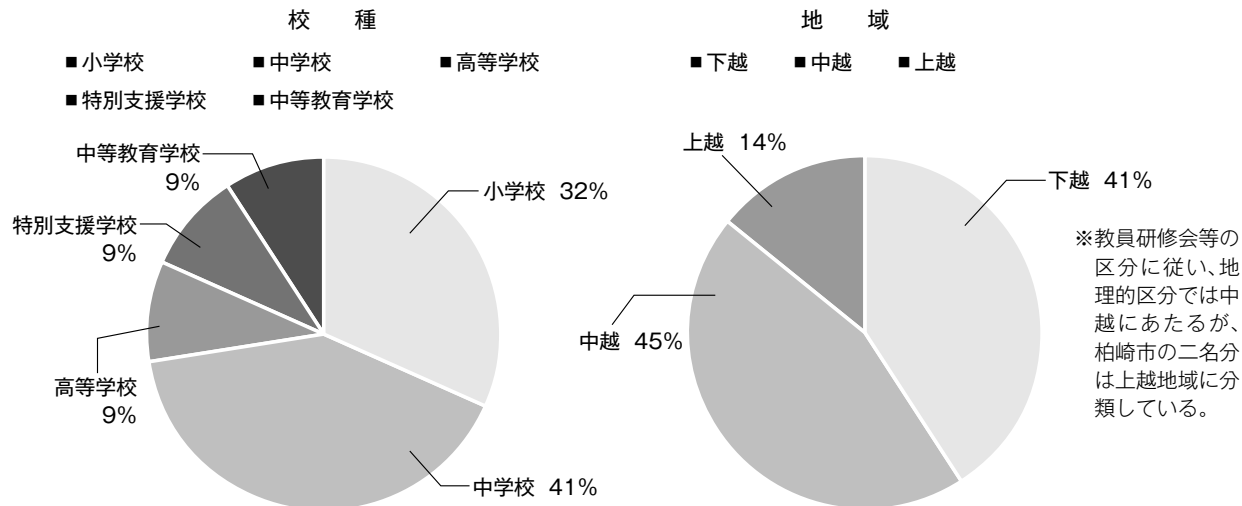
「五感での鑑賞」(特に触覚)は、特別支援学校の教員の実践から出た話題であると思われるが、特に参加者の関心を引いたようで、第2ラウンドの意見交換で周囲のグループにも波紋を広げていた。触覚は素材感とも関わり、重要な造形要素の一つであるが、「目」だけによらない鑑賞は案外見落としがちかもしれず、その分教員には新鮮に映ったようであった。一つの作品から「どんな音が聞こえる?」「どんな匂いがする?」「気温は?」「手ざわりを想像しよう」などの問いかけをし、作品をより深く鑑賞しようとすることは、美術館ではよくあることである。しかし、今回話題になっていたのは、「実際に触れる」ことであったようで、それは、作品の保存も使命の一つとする美術館では基本的に難しいことのように思われる。

一方で、キーワードが「鑑賞」という大きな観点であったことから、話合いの内容は多岐に渡っていたが、上記の件も含め、内容は、学校での鑑賞の授業の方法に話題が集中しており、主催者側が狙っていた「学校が美術館に求める支援」の話題はあまり出てはいなかったようである。ただ、多くの参加者が、子どもたちに「本物を見せたい」とは考えていたようである。「アートカード」の話題も多く出ていたが、導入として使うには有効だとしても、ウォーミングアップの域を出ることはないという認識で、やはり本物を見せたいという思いが教員にはあるようであった。

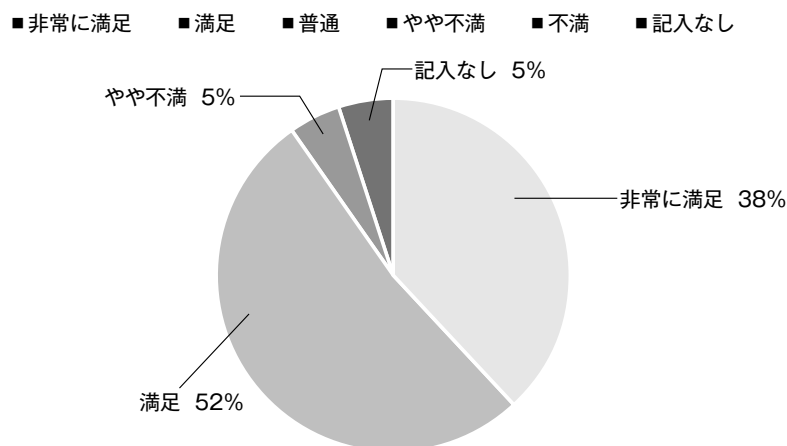
しかし、学校の授業の中で美術館の本物を見せるには、時間や予算が必要である。授業時数が少ない図工・美術では、たとえ近くに美術館があったとしても、子どもたちを連れてくるのは困難であるというのが大方である。対策として出されたのは、「美術館の学芸員に学校に来てもらう」「ビデオ会議システムで教室と美術館をつなぐ」などであり、これは既存の出前授業等の活用を積極的に推進することで解決できそうにも思われる。また、「デジタルアーカイブを作ってバーチャルで学ぶ環境作り」「google mapで美術館見学」などの意見もあった。美術館が持つ資料・情報をスムーズに利用できる環境を整えること、また、ビデオ会議システムや子どもたちに配付されているタブレットの活用等、ICTを活用した新しいプログラムの開発の必要性を示唆するものであろう。

研修会全体について

校種および地域(当日参加者の割合)



研修の内容について



非常に満足：8名

- ・様々な校種の先生方と学芸員の方と“対話”できたこと。(特別支援学校教員)
- ・対話型鑑賞の楽しさを感じた。様々な方から、色々な意見が出て、自分の初発の考えもどんどん深められた。(特別支援学校教員)
- ・生徒の気持ちになって「対話型鑑賞」を楽しめました。(中学校教員)
- ・本物の絵を見て、様々な方と鑑賞できた。同じ立場の方と情報交換できた。(中学校教員)
- ・とても有意義な研修でした。ありがとうございました。(小学校教員)

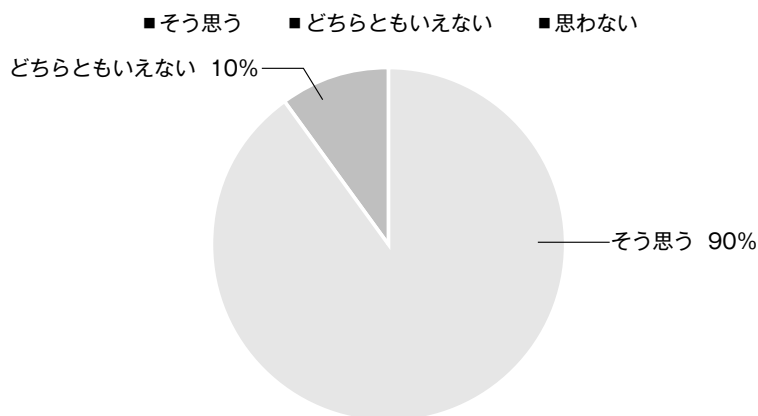
満足：11名

- ・様々な先生方と、交流が出来てとても勉強になりました。少しもの足りなさも感じたので、もう少し長く話せるとより満足できたと思います。(中学校教員)
- ・久しぶりに美術の研修に参加しました。学芸員さんが多数出席され身近に意見交換できて(意外にも)良かったです。し

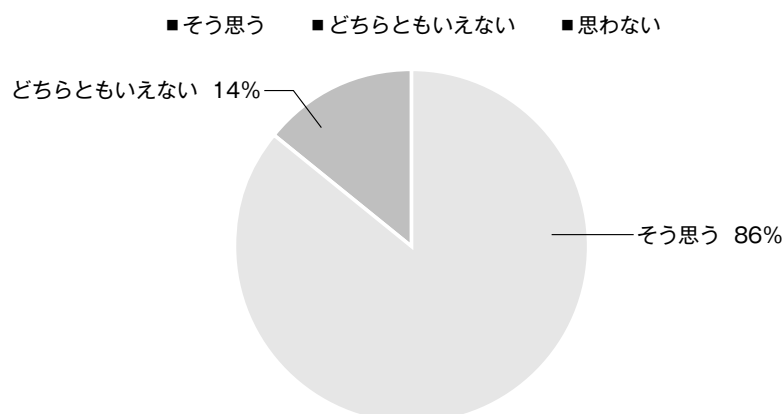
- かし、この会を続けて、これからの学校の美術鑑賞と美術館のあり方を考えていかなければと思いました。（中学校教員）
- ・対話型鑑賞を生徒目線で体験できて良かったです。同じ校種の方との交流もしたかったです。（次回、是非お願いします。）（中学校教員）
 - ・普段話し合えない教科運営の課題についてシェアしたり、情報を得ることができて、よかった。学芸員さんともお話できたことも、良かったです。（中学校教員）
 - ・美術館で、小中高諸学校の先生方といろいろ話せて良かったです。（高等学校教員）
 - ・美術館の方、他校種の方の鑑賞に対する思い、美術に対する思いを聞くことができたから。（小学校教員）
 - ・美術の先生が校種を越えてこんなに大勢集まる機会は貴重です。（中学校教員）

今後について

1. 次回このような機会があったら参加したいですか。



2. またこのような研修があったら他の人にも勧めたいと思いますか。



- ・自分だけの考えで生徒へ伝えることはどうしても偏ってしまいがち。色々な意見をお聞きし、自分の考えをどんどん広げ深めたい。（そう思う・そう思う／特別支援学校教員）
- ・美術館で本物の作品を前にした対話型鑑賞。（そう思う・そう思う／中学校教員）
- ・学芸員、他地区、異校種の交流が新鮮でおもしろかった。生徒のわくわく感につながると思うのでおすすめしたい。（そ

う思う・そう思う／中学校教員)

- ・学芸員さんと教師の交流は、大切だと思ったから。(そう思う・そう思う／小学校教員)

その他、ご感想やお気づきの点などありましたらご自由にご記入ください。(抜粋)

- ・美術館と学校がどのようにつながることができるのか、学校が美術館を利用しやすくするためにどのようなことが考えられるのか、に特化した話し合い、意見交換にした方がよいのでは…(そうした会だと思って参加したら、少し違いました。)

P.S 研修会の後に、テーブルごとにそのような意見交換※がされていたようですが、時間がきたので参加できませんでした。※これが大事では？(小学校教員)

- ・出前授業で子供に対する授業はあるのですが、対教師に対する研修があるといいなと思いました。小学校だと図工専門の先生は少なく、図工に対する苦手意識をもつ方もいるので、鑑賞の研修があると助かります。(小学校教員)
- ・私が感じた“楽しい” “もっと知りたい” “もっと話したい” と子どもたちが思ってくれるといいなあ。(小学校教員)
- ・とても楽しい時間でした。勉強になることも多かったので、ぜひまた参加したいと思います。たくさん開催するのは大変かもしれませんが、たまにまたこうした会を開いていただけると、とてもうれしいです。(中等教育学校教員)
- ・いろいろな学校種の先生方の現場の声や、学芸員の皆さんの話を聞くことができ、有意義でした。(中学校教員)
- ・今後もぜひこの様な研修を続けてほしい。(特別支援学校教員)
- ・班が、年齢、校種など混ぜたところが正解でした。直接お会いして話ができることは、幸せですね。どうもありがとうございました。これからの美術館(未来の)のあり方に期待しています。(中学校教員)
- ・このような研修のきっかけをくださり、ありがとうございました。出前講座も含め、私自身が美術館と学校の架け橋となるつもりで授業をつくりたいと思います。(中学校教員)
- ・コロナの時代に、このような機会を作ってください、本当に本当に感謝しています。小学校の先生や中学校の先生の日頃の熱心な活動を知ることができました。私は国語科ではありますが、“表現”ということでは、美術も、文学も、音楽も通づるところがあり、たくさんのヒントをいただきました。明日からの授業に生かしたいと思います。ありがとうございました！(中等教育学校 高校教員)
- ・出張授業に来ていただきたいです。(中学校教員)
- ・実際に集まり、顔を合わせて話し合う、対話型鑑賞する機会をいただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。(小学校教員)
- ・本物にふれさせたい。作品もそう。学芸員さんもそう。(中学校教員)
- ・楽しく、じっくりと考えたり、イメージしたりすることができました。(小学校教員)
- ・私は美術の専門では全くありませんが絵を見たり子供と楽しく作品をつくるのが大好きです。今日は先生方、学芸員の方からたくさんの刺激をもらいました!!また来年もこの研修会をひらいて下さい!!!!(小学校教員)

多くの参加者が、異校種の教員や美術館学芸員との交流について記している。教員の研修会では、おそらく校種や地域を越えて行われることはあまりないのではないだろうか。少なくとも義務教育ではない高等学校の教員まで含む研修会は殆どないのではないと思われる。今回の対象者は、幼稚園・保育園は含まなかったものの、小学校・中学校・特別支援学校・高等学校までを含み、また担当教科を問わないことも特徴であった。美術での鑑賞をとりあげた研修であったが、鑑賞は、他人に伝えるためには言語活動が重要になる面があり、また作品の社会的・歴史的背景がとりあげられる場合もあり、まさに教科横断的な側面がある。そのため、教科を越える人々が集まって鑑賞について話す機会は有意義であったはずである。今回は特に参加者の専門・担当は把握しなかったが、意見交換時やアンケートなどで他教科の担当者が何人も混じっていることを垣間見ることはできた。そのような専門外の参加者が複数

あったこと、その参加者が本研修会に好意的な反応を示していたことは、鑑賞教育の可能性を示唆するものでもあろう。

さらに、本研修会はコロナ禍の中で実施されたが、そのような環境下で、美術館学芸員も含め、多様な参加者が直に顔を合わせて話し合うことができたこと、それにより各参加者の視界が広がったであろうこと、そしてその新鮮さが、本研修会の最大の成果だったように思われる。

参加者が概ね本研修会を好意的に受け止めてくれた一方で、美術館と学校との協力で特化した話し合いをすべきであったという不満の声もあった。確かに、主催者側のそもそもの目的は、美術館に対する学校教員の需要を探ることであったはずだが、その目的が達せられたとは言い難い状況であったと言わざるを得まい。

とはいえ、研修会の案内文には「本研修は、学校と美術館が相互に声を出し合い、新潟県全域を視野に入れた美術教育の現状と課題を共有するためのものです。」と謳っており、また、まずは美術館学芸員と学校教員とが対等の立場で話し合い親睦を深めたいという美術館側の思いもあった。一部、意見交換の場で、学芸員が話し始めると教員が学ぶ態勢になってしまった場面もあったとはいえ、この点に関しては、一定の成果があったといってもよいのではないだろうか。

まとめ

今回の研修会の内容は、「対話型鑑賞の体験」と「意見交換会」の二部構成であった。アンケートの反響を見る限り、この構成は間違いはなかっただろうと思われる。が、その反面、美術館側の振り返りでは、「意見交換会の時間が足りなかった」の声が多く聞かれ、教員のアンケートにも「もう1ラウンドしたかったです」「少しもの足りなさも感じたので、もう少し長く話せるとより満足できたと思います」とあり、半日で二つを成り立たせることは難しかったようだ。

対話型鑑賞に関しては、これまでもそれぞれの美術館が普及に努めてきたことではあり、既にその効果を認めて活用している教員、また知ってはいても接する機会に恵まれずこの研修会で初めて触れた教員など、様々な参加者が入り交じっていたようである。いずれにしろ、ある程度的人数が集まって学芸員のファシリテーションによる対話型鑑賞に参加したことは、どの参加者にもまたない機会になったようで、よく知り活用している教員でもその効果を再認識することになったと思われる。

意見交換会では、異校種同士と学校の外部にいる学芸員が同じテーブルで話し合うことにより、問題解決とはならなかったまでも、互いに共感し合えたし、また教員同士の情報交換で新しい視野も開け、教員の参加者は、それぞれの成果を持ち帰ることができたようにみえる。

しかし、意見にあった「美術館と学校がどのようにつながることができるのか、学校が美術館を利用しやすくするためにどのようなことが考えられるのか」、本研修会の目的であった美術館が学校に対してどんな支援ができるのか、については、解決には至っておらず、まだこれから俎に載る状態である。

とはいえ、本研修会は、NIIGATAアートリンク教育普及部会による初めての事業であった。美術館学芸員の、教育普及担当者として学校教育に寄与したいという熱意と、鑑賞教育に興味を持ち、これを子どもたちの教育に役立てたいと願う学校教員の熱い思いとが、出会えた場となっただろう。この事業はまだまだスタートにすぎないばかりである。今後も継続していくことで、積み残した課題に挑んでいくこととしたい。

(新潟県立近代美術館 専門学芸員)